

## 3月の生育経過及び4月の管理方針

3番果房は早期作型で1～3果収穫、普通ポットで収穫開始～白熟となっている。4番果房は早期・普通期ともに出蕾し始めているが、未出蕾から着果まで生育差があり、今後は急激な出荷増はみられにくいと考えられる。

3月は、曇雨天日が多かったため灰色かび病や菌核病が多発していた。また害虫の発生も増え、特にハダニ類が多発しているほ場があった。

4月は気温が高く日射しも強くなるため、生育は旺盛となる。成熟日数も短くなり着色は早くなるので、収穫遅れによる過熟果・傷み果が発生しやすくなる。ハウスつま面の十分な開放、遮光資材等の活用による降温対策を徹底する。

親株は心葉が動き出しており、4月中旬以降ランナーも発生してくる。同様に「炭そ病」の病原菌も活動し始め、感染が懸念されるので、予防防除に努める。



## 今後の管理について

### ● かん水・液肥施用

気温上昇、葉からの蒸散量の増加に応じ少量多回数かん水に努める。

軟果対策として収穫直後のかん水とし、収穫前日のかん水は控えるようにする。

水分不足は、果実肥大不足とハダニ類の発生拡大につながるので注意する。

### ● 摘果（着果制限）

3番果房以降の着果数は3～5果/枝に制限するが、果房の強さを考慮して調整する。

### ● 果梗の除去

収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房出蕾促進、黒カビの発生防止を目的に、早めに除去する。

### ● ダニ防除

ダニが発生している株は、強めの摘葉を行った後に、防除薬剤が葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。また、多発の株は、ダニの拡大防止に除去する。

### ● 温度管理

温度管理は品質向上を目的に、晴天日はサイド・谷・つま面の換気を早朝より行い、極力低

温で管理する。

夜温が7℃以上（平年値では3月末以降）の場合は、夜間も開放状態とする。

遮光資材の活用を行い、昼間の降温を図る。（ビニルへの塗布は、1回目を薄めに行った場合は、日差しが強くなった頃に追加塗布する）

### ● 軟果対策

高温期ほど果実の成熟、着色が早くなり、収穫遅れによる「過熟果」の発生が多くなる。

そのため、収穫日の間隔を短縮し、高温の時間帯での収穫を控え、着色基準の厳守を徹底する。

収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は早めに低温の場所に移す。

果実付近の通風が悪くなっている場合は、果実表面に「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い通風を確保する。

## 親株の管理について

### ● 炭そ病対策

「炭そ病分生子（孢子）」は、半日程度の濡れた状態でイチゴに感染する。このため、かん水は午前中に行い、夕方には乾いた状態とし、感染拡大を防ぐ。雨が続く場合は、農薬の予防効果は7日間程度あるので、雨の合間に防除し、「炭そ病菌」の浸入を防ぐ。

また、「炭そ病菌」は株の傷口より侵入することが多いので、下葉・果房除去前と直後の2回の防除を必ず行う。特に、除去直後（当日または翌日）の防除は遅れないようにする。

### ● 追肥

プランターでの親株育成では、基肥のI B化成を親株1株当たり1回目10粒程度施用した場合、追肥はI B化成5粒を5月上旬までに追肥する。

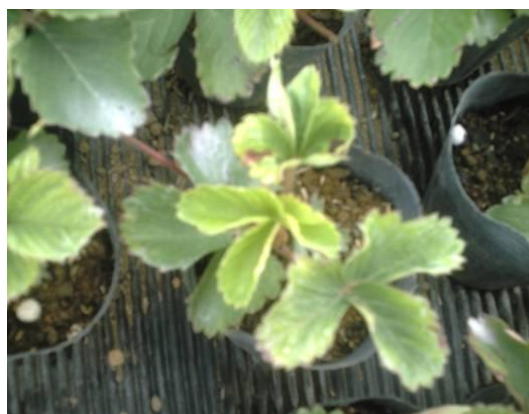
ランナー発生期の4～5月の乾燥は、生育遅れやランナー数の減少をまねき、採苗時期の遅れ、採苗本数不足の原因となるので、かん水を行う。

### ● カキノヒメヨコバイ対策

成虫が庭木や垣根（ツツジ・サツキ・ツバキなど）の葉裏で越冬し、イチゴの1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲症状を起こす。暖冬時に多発するので注意する。



[カキノヒメヨコバイの成虫（緑色）体長9mm]



[心葉の湾曲症状]

### 重点啓発事項(スローガン)

**1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底！**

**2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳！**